

## 編 集 後 記

最近はどの外科系学会でもビデオセッションが花盛りである。一昔前の手術画像は16mmで撮影するため、大変な手間がかかったのを覚えている。大掛かりなセットは同じ操作を繰り返すため、術野をライトで乾燥させて撮影した。当時は、実際に見学する機会がない限り他施設の手術など知るすべもなく、「とある病院のある先生は手術が上手で、ここはこうするらしい」などという噂があっても、実態は誰も知らずに噂だけが先行してしまうことも少なくなかった。最近では小さなカメラで手術も簡単に撮れ、カメラ付きの无影燈があればさらに簡便に開胸や開腹の手術撮影が可能になった。一方、内視鏡外科は手術映像を様々なメディアでたやすく保管でき、その画像は学会活動のみならず教育にも威力を発揮している。このように最近では他施設の手術を容易に議論できるために、新しい手技の速やかな普及のみならず基本的な手技についても施設間差の縮小が期待されるようになった。

手術画像が手軽に発信できるため、学会での手術中継すなわちライブは人気のあるセッションのひとつとなった。元来、手術そのものに最も興味をそそられる外科医は、誰もが他人の手術を観たいものである。とくに内視鏡外科のような新しい手術について、「百聞は一見にしかず」とは現状をよく言い当てている。しかし観客と化した外科医は、心中ではなんらかのハプニングを不謹慎ながら期待している節もある。それに対し、ライブを担当する外科医は大勢の聴衆に観られていると意識した途端に、平常心を少なからず失うのが現実である。いかに経験を積んだ外科医でも、精神状態が普段と全く変わらないはずはない。少なくとも自分自身がいくつかライブを行った経験上、これは紛れもない事実である。また司会者には終始術者の緊張を解きほぐす術が要求される。元々、イチローのように大観衆の中で勝負をするエンターテイナーと外科医の精神構造と経験は根本的に異なる。そのイチローでさえ、大記録を前にして緊張に押しつぶされかけていたそうである。手術は患者さんにとって正にワンチャンスで、患者さんは最高の状態で外科医に自分の手術に臨んで欲しいに違いない。そう考えるとライブをやりたがるまともな外科医などまずいないのである。学会ではどのような点でライブに学問的価値をおくかあらかじめよく議論し、術者のみならず司会者もライブの緊張感を十分理解して行うべきであろう。